

近時出現の五六の所謂秦鏡

——透彫蟠螭紋鏡其他——

梅 原 末 治

一

所謂秦鏡なる一類が世に傳唱せられる様になつてから、まだ十年を出でないのであるが、而も近時支那の北平、上海等から海外に流出する遺品は夥しい數に上つて、其等から宋代以來の著錄に嘗て類例を見なかつた古鏡の新様式が明になつたのみならず、うちに種々の珍しい形式の存することも知られて來て、いまや支那の古鏡鑑の學は前漢以降の形式の變遷の研究から轉じて、所謂秦鏡諸類の性質の考查から、其の起源の問題に對する新生面を展開せんとするの風潮を馴致してゐる。私は其の自らなる趣好よりし、また東方文化學院京都研究所に於ける研究題目の關係から、此の種の古鏡に對して絶えず注意を怠ることなく、從來新資料に接する毎にこれが紹介につとめ、併せて鄙見を錄して來た次第であつたが、一昨年以降に於いて更に興味のある五六の新出の遺品を囑目して知見を擴める事が出來た。是等は淺野棣吉、白江信三、田中吉次郎等の諸氏が支那か

ら帶歸した所のものであつて、中で透彫怪獸文鏡二種と古式の方鏡三面とを著しい類とする。特に前者の一は大正八九年の頃關野工學博士に據つて本邦に齎れた所謂周鏡と同一形式に屬し、また他は嚮に『國華』誌上に公にした透彫虬龍紋方鏡と連關する點で、學術上の感興を惹くものである。依つてこゝに右方鏡に關する報文の姉妹編として、上記遺品を中心として、なほ詳細な記録のない關野博士將來鏡等の實際を錄し、資料紹介の文とすると共に兼て其等の特質に就いて考へ及んだ所を舉げることにする。

〔註〕(1) 梅原『歐米に於ける支那古鏡』第五節「所謂秦鏡の性質と支那鏡の起源」參照。

(2) 梅原「古式支那鏡の二新例」(『考古學雜誌』第二十卷第一號)同「支那の古鏡鑑に關する二三の新資料」(『歴史地理』第二十八卷第三號)等。

(3) 大正十一年十一月の考古學會例會に於ける關野博士の講演の題目に據る。

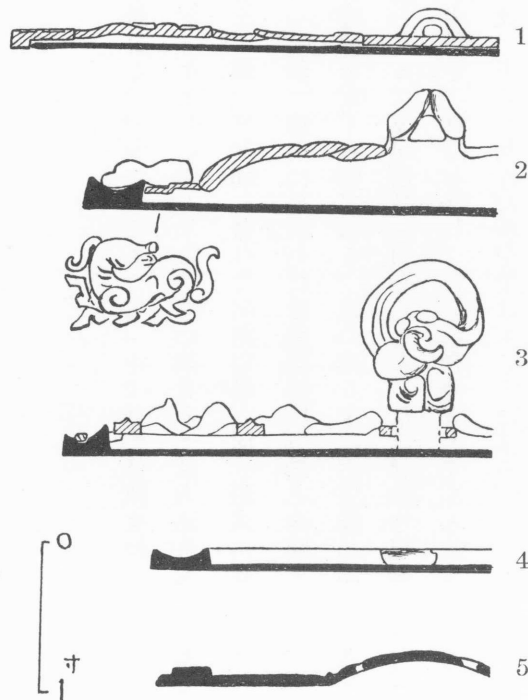
(4) 梅原「最近出現の透彫禽獸文方鏡」(『國華』第四十二編第十一・第十二兩冊)。

二

新資料として先づ擧ぐ可き透彫怪獸紋鏡の一つは圖版第五に寫眞を載せた現在紐育ウインスロップ氏の所藏に係る遺品である。これは面徑五寸六分餘、緣厚一分餘あつて、通有な鏡としては稍、大形の部類に屬し、其の體は嚮に紹介した方鏡類と同じく、鏡背と面との二つの部分の組合せから成立つてゐる(第一圖)。即ち面は白銅質の薄い扁平な圓板で、鉛銅の滑かな色澤を呈し、像を映するもふさはしく、これに對して鏡背の方は青銅製と覺しく、鮮かな青緑の鏤を生じ、鈕座と縁との間が透彫文となつて、縁の一部が下方に延び其の内側に鏡面を嵌め込んだものである。鏡背の主要部をなす所の右の透彫文は七面取りの節狀小鈕を繞る座から稍、幅廣い縁に至る全面を占めて、それに絡み合ふた虺龍を薄肉刻の手法で鑄表はしたもので、而して構圖は、鈕座の三方に一種の渦狀華紋を出し、外縁からまたこれに應ずる單簡な葉狀紋を起して、是等の間に體軀の旋轉した三個の龍の躍動した形を容れて六花形に相似た主圖様をなすと共に一部に虺形を配して、それに複雑味を加へ、巧みに全面を被ふて、一の纏つた圖紋をなしてゐる。右の圖形中の虺龍形は近時著しく類例を加へた所謂北方系の動物形の帶鉤に見る形式に近く、頗る雄勁な手法を表はし、而もそれが旋轉して鏡背を埋めてゐる所、別に配布した渦樣紋との間に一種の階調を保ち、其のアラベスク的な構圖は奇怪な獸形紋の域を脱して優美なリズムミカルなものをも兼ね備へ

て居り、此の點從來の透彫方鏡紋の靜的にして且つ平面なのに比べて著しい對照をなし、鏡の意匠として頗る賞するに足るものがある。以上の透彫と共に此の遺品では特筆すべきものに縁の象嵌がある。これは現在綠鏤に覆はれて明瞭を缺く憾はあるが、幅廣い縁を通じて一種S字様の複合渦紋を鑄出した間に青石を嵌入したものであつて、其の白色の膠着材の上に薄片を張る所の手法は圖様と共に

第一圖 透彫文鏡斷面圖



所謂漢代の華麗な大形帶鉤に見る所と軌を一にする。(2) 質料はいまこれを明にしないが象嵌は内區の一部にも施されてある。それは龍の四脚の體に接する部分に於いて見るのであつて、現在凹んだ小圓形のうちに白堊の物質が遺存してゐる。

本鏡はいま面背を通じて一部分に至みがあり、面にもと龜裂破損のあつたことは修補の痕から察せられる。多くの例に漏れないで出

土地乃至伴出物の明ならぬことを憾とするが、銅鏤等からすると普通所謂秦鏡の本場とも見る可き淮河の流域特に壽州附近ではなくて、寧ろ北支那の某地の出土であることを推測せしめるものがある。

前者に對して他の一面の透彫怪獸紋鏡また同じく鏡背と面との二つの部分を組合せたものではあるが、此の方は鏡面の縁部が上に延びて、それに透彫の稍、盛り上つた背部を嵌め込み、兩者の間に一種獸形の飾り鉾を加へて完形をなした式に屬し(第一圖^{の2})、其の透彫は蟠螭紋で丸彫に近く、頗る古調を帶びてゐる。

鏡面は徑四寸五分五厘あつて、縁端が少しく丸味を帶びた外には反り等のない水平な面のもので、いま薄い青緑の鏤衣を着けてゐる。其の縁部は上に突起して厚さ二分餘を測り、内側に別個に鑄造せられた鏡背を嵌め込む装置があり、上面幅約四分の部分は中央内凹みを示して、こゝにS字形の連續沈彫渦紋を表はし、それが背文の一部を形成する。次に鏡背は前者に嵌まる二段の素帶の部分から鉾に至る間が稍、盛り上つた廣い一區をなして、主文様をなす所の絡んだ蟠螭紋を表はす(圖版^{第六})。此の蟠螭紋は體軀が丸彫で而もそれが透彫をなしてゐて、二十餘の虺形の體軀の絡んで旋轉する所頗る奇怪なものではあるが、而も鉾孔が恰も双眼に當る様になつた獸鉾を中心として、その間に自ら規矩のある配布をなし、相似た圖形を四度繰返して、外部に近く多くの虺首を見るとところに構圖上の一の重點が認められる。以上の外鏡背にはなほ面背兩方の接觸部に加へた一種の鉾様の部分があつて、これが動物形を表はした文様の一部を構成する。鑄上りがよくないので現在では明瞭を缺くが、それは首を後

方に向けた怪獸の薄肉刻であつて、圖形に北方 Zonars 系の趣を具へ、また手法は所謂秦銅器に見る類に近く、其の様式の特徴を持つた點が注意せられる。而して此の圖形を内側より見る可く四方に加へることに依つて稍、單調すぎる外區を引き立たせる効果を擧げてゐる(第一圖^{の2})。

いま此の鏡を以て既出の透彫紋鏡に較べるに、圖紋の古調を帶びた動物の浮彫から成り、而も複雑な態様を示すことが容易に認められるのであつて、此の如きは從來の支那の著録に絶えて所見なく、また一の新形式をなすものとする。所が初に一言した様に此の同式品が早く早く關野工學博士に依つて我が國に將來せられてゐる事は吾々の興味を惹くのである。博士の將來品は東京の大倉集古館に藏して、周鏡なる所傳の下に珍重せられたが、大正十二年九月の震災に破損を受けて現在では頗る舊態を失ふてゐる。⁽³⁾私は幸にも其の災に先立つて友人藤田亮策君と共に詳細調査したことがあるので、茲に當時の所見を録して其の原形を傳へることにする。

さて博士の齎された此の類は三種を數へるが、中でもと完形を保つた一面が既述の遺品と同工な點から先づ擧ぐ可きである。それは全然前者と同じ式の透彫蟠螭鏡に屬して、徑四寸八分を測る鏡面の周縁が高く背部に延び、其の内側に別に鑄造せられた背紋を嵌め込んで一の鏡體を作つてゐる。尤も圖版第七に見る様に本例では面と背部との連接は他の附加物に據らないで、鏡背の外周の三方に小さな柄を作り、縁の内側に設けた柄穴にそれを差し込む所謂柄差の手法を用ひて居り、圖様また、面からつゞく外縁の上面は同じく内凹

みではあるが、文様はなくて中央が更に一段凹み、同部に白聖狀の物質（鉛？）を嵌入して別個の手法を示し、鏡背の透彫紋は内外の二區に分れて、兩區共に頭部を交互にした丸彫の旋轉した虺形を巧みに絡ませたもので、外區は單位圖形を八度、内區は四度繰返し以て全面を被ひ、後者の中央に恰も蟠居の虺群から躍り出したが如き體軀を曲げた一の立體的な虺形の鈕をなす所に細部上の特徴がある（第一圖）。なほ此の鏡では面部の内側に一種の沈紋を存して、鏡背文が二重となつて居りこれが上面の透彫蟠螭の一部の若干動く様に作られてゐること、相俟つて前者に比して製作上一層技巧の加はつたものがある。右の内面の圖紋は吾々の調査した際には鏡が完存、單に透彫を通じて沈紋のあることを認め得るに過ぎなかつたが、大震災で上面の透彫が破損した結果圖様が明に見られる様になつたと云ふ。瀧文學博士惠興の寫真に依ると、それは一種の虺龍文の沈彫であつて、次に記する博士將來の他の一面と同式の様に思はれる。鏡は兩部共に青銅の鑄物であつて面に布の附着した部分を見るが、而も出土後傳世したものか鮮かな土中古の色澤に乏しく、もと面に鍍金したかと覺しい痕が認められた。そこで作りの異様なことと併せて當初は寧ろ鏡とするも疑問を懷いたのであつたが、⁽⁴⁾二つの部分から組立つた類例の新發見に加へて、既記の鏡が青緑の銹衣を着け乍ら面になほ水銀色を遺存してゐるので、こゝに曩日の疑念を解くに至つたのである。

次に博士將來の第二・第三の遺品は共に同じ形式の鏡の部分であつて一は鏡面、他は其の背部と考へられる。前者は徑三寸六分あつ

て、其の作りは上記の二例の鏡面部と全然規を一にし、薄い鏡面の周縁が一段高く作り出され（第一圖）、⁽⁴⁾其の内側に鏡背を嵌め込む三個の柄穴があり、また幅四分に近い縁の上面は中凹みで、こゝに第一の例に見たと同様なS字狀連續渦紋を沈彫してある。而して本遺品では前例に單に存在を認め得たに過ぎない面の背部に於ける虺龍雷文が明瞭であつて、其の形式の詳細が分る。圖版第八の1に見る様に、それは中央、雷紋の單位四個を配した單簡な一區を繞つて、外邊三重の圈に至る間にS字形の體軀をした双頭の虺龍形を四度繰返した式に係り、表はされた虺龍形は沈文ではあるがよく所謂秦銅器文の様式を具へてゐる。此の鏡面は其の圓形に若干の歪みがあり、また縁に近く輕微な反りが認められる。一部分に鉛白銅色の光澤を存してはゐるが、通體堅い綠銹で被はれて、出土後磨研した縁の一部の示すところ青銅色を呈し、もとの質料の白銅でないことを察せしめるものがある。されば遺存する面の鉛白色は或は他の物質を塗沫したと見る可きであらうか。

右の鏡面に較べて第三の背部と思はれる遺品は徑三寸四分を測り、三つの部分から成る（第一圖）。⁽⁵⁾即ち中央の一區は稍々盛り上つて、二個の蟠居した有翼の獸形を薄肉透文にて表はし、これを繞る中帯は絡んだ蟠螭紋で一の特徴を示したものであり、外帯は一種の絡帶文の間に突起した獸面を四方に配して、それが各々内孔をなし面への嵌め込みの裝置を兼ね備へてゐる（圖版第⁽⁸⁾八の2）。各部の圖文の形式は所謂秦銅器文に極めて酷似してゐることはいま改めて繰返すまでもなく、而してそれはまた上例に見る所にも同じい。吾々が此の鏡を調査し

た大正十年の初夏には通體赤褐と緑との銹に被はれて圖形の細部を究め難かつた。然るに大震災で、高度の火力に遇ふて形に歪みを生じはしたが銹が失はれ今日では餘程瞭かになつた様である。⁽⁵⁾此の遺品は中央に鈕形はないが、其の透彫の間に紐を通じて使用したものであろう。

如上顯著な遺品の外に此の類として、なほ近く帝室博物館の收藏に歸した一面がある。⁽⁶⁾本鏡は徑二寸九分の小形品で、いま鏡背の一部を失ふてゐるが、全く同一の形式を示し、鏡面から突起した縁にはS字形連續渦文の沈彫があり、同部に附加した三個の突起に依つて透彫蟠螭文の鏡背を嵌め込んだものである。⁽⁷⁾尤も此の遺品の銅質は恰も宋代以降の鏡に似て、古色に乏しく、爲に或は後代の摸古品かとの疑を挿ましめる。併し前數例が必ずしも純然たる白銅ではなく、また分析の結果所謂秦鏡に種々の成分のもの、並び存することが確められた點⁽⁷⁾などからするに、此の場合直ちに以て仿製と速斷するわけには行かぬ。次に鏡面を缺如し、また鈕を缺きはするが、關野博士將來の第三例と同じ鏡の部分とするならば、同式の遺品は他にもある。私の見聞した歐米蒐儲の實例は數例を數へて、中大英博物館所藏の精品⁽⁸⁾（圖版第⁽⁹⁾）バーネット（H. K. Barnett）氏の藏品（圖版第⁽⁹⁾）等は其の一二であり、本邦でも昨年秋大阪小澤龜三郎氏の支那から將來した四個の虎形を透彫にした遺品⁽⁹⁾（圖版第⁽⁹⁾）を特色ある一とする。是等は孰れも挿入の寫真でも分る様に所謂秦銅器文の特徴を具象してゐて、前數例との間に様式上の一致を見る。然らば是等からかゝる鏡は實は稀有なものでなくして、所謂秦鏡のうちの一形式

近時出現の五六の所謂秦鏡

をなしたと解す可きことになるのである。

〔註〕(1) Oswald Siren: Histoire des arts anciens de la Chine. II. Pl. 7. 所載の諸例の如きは其の例である。なほ私の見た此の種の佳品は近刊の『支那古銅精華』の雜器部に收録の豫定である。

(2) 『泉屋清賞』續編第二〇一圖以下の數個、ブラッセルのストックレー氏（A. Stocker, Bruxelles）の藏品等が此の種の最も著例として數へられる。（如上シレン氏の著書圖版第一五參照）。

(3) 此の類は大震災の際收藏の大倉集古館の罹災で失はれたものと想像してゐた（既註『國華』の拙稿參照）。それが破損し乍ら現存することを知つたのは瀧文學博士の教示に據る。而して先生は現狀の寫眞をも惠與せられたので、其の狀態を確め得た。こゝに記して厚く謝意を表する。

(4) 梅原「銅劍銅鉾に就いて」(五)『史林』第九卷第一號（第一〇項並に註(7)參照。此の疑問は既に『國華』誌上の拙稿の註で撤回して置いた。

(5) 瀧博士惠與の實大寫眞に據る。

(6) 此の鏡の存在は同館矢島恭介君の注意に據り知ることが出來た。調査に當つて同君の便宜を與へられたことゝ共に感謝する。

(7) 小松茂・山内淑人兩博士「東洋古銅器の化學研究」及梅原「支那古銅器の化學的研究に就いて」(以上『東方學報』京都第三冊所收)參照。なほ其の後行はれた所謂秦鏡の分析の結果一層右の點が明瞭の度を加へることになつたのを附記して置く。

(8) R. L. Hobson: Early Chinese Bronzes (The British Museum Quarterly vol. VII. No. 1.) 挿入の寫眞はホブソン氏の寄與せられたものである。

三

前項に録した二種の透彫怪獸文鏡に於いて、最初の遺品が製作上嚮に舉げた透彫方鏡と同式であることは容易に認められるのであつて多言を要しない。併し示す所の圖紋にあつては方鏡の類に較べて

構圖、表現の手法等が著しく進んでゐて、それ等は從來漢代と考へられる他の遺品に見るものと相近いこと既に指摘した如くである。従つて同じ秦鏡とは謂ふものの、形式學上前類より後に來るは固まりのこと、製作の實年代の如き前漢に入つてゐるかも知れぬ。右に對すると第二の透彫蟠螭鏡の類は、相似た二重式の作りではあるが、稍、態様を異にして且つ其の主文様のより古調を帯びてゐることが意識せられる。而して此の類の圖紋が通じて所謂秦銅器に見る所の様式を具象し、また構圖が一の圖文として纏まりを示し且つ整齊な點も既に解説の條に擧げた。さればこれ等は第一の類よりも形式上早いものと解す可くなほそれが將來資料の加はることを豫想せしめる點で、所謂秦銅器と同時に進められた古式鏡の一形式とする推測を加へしめる。かゝる異體の鏡が前漢以降例を絶つて獨り所謂秦様式のうちにのみ存する事實は當然注意に値しよう。さり乍らそれに就いては既に同系の方鏡例を紹介した際、考へ得べき二つの推測説を載せたことであるし、⁽¹⁾今日なほ右に加へる新しい解釋をも得ないから、こゝにはそれを繰返すに過ぎない説述はすべて省略する。但し如上の遺品に接して別個の觀點から興味を覺ゆるのは、第二の類が圖文の古調を帯びてゐるにも不拘、鏡背紋として一の整齊な配布を示して、それが從來知られた所謂變様羽狀獸紋地鏡乃至細紋地蟠螭鏡等に於いて認めらる單なる地紋から漸次他の圖形を加へて遂に鏡背自體の圖紋への發展の過程を示す類と稍々趣を異にすることである。同じ差異は他方銅質の上にも認められる様である。即ち從來の所謂秦鏡は種々の類を含むも上に記した二群の系統にあつては銅質

が概して佳良で、漆黒の色澤を呈するものを多數見受けるのに對し、問題の透彫鏡の古調を帯びた類は、それは透彫なる鑄造技術の關係からにも因ることではあるが、銅質の外觀が可なり違ひ錆色また趣を異にしてゐる。此のや、著しい差異を示す二群のうち從來最も多い所謂秦鏡の形式から漢代の標式的な圖様が完成されてゐることの認められるのに較べて、透彫鏡は後代に全く跡を絶つのは、其の寧ろ稀なもので、嚮に述べた南露等に行はれた別種の鏡體を摸した所産として、同式の存在を理由づける可く、上に擧げたものはじめ所謂二重鏡體の圖紋に北方系文物の色調のより強く思はれることもそれを裏書きする様に見える。併しかく認めるには鏡背紋として完成し、且つ複雑なものとなつてゐる透彫鏡のより古調である點が自然的に解し難くて、こゝにそれを當代地方地方に據る形式の差異とすることの可能が別に考へられるのである。從來の漆黒の佳良な質の鏡は主として淮河の流域特に壽州を中心とした地帯の出土と傳へられてゐるのに對し、問題の鏡のうちに北方的な色澤を有するものや、細川侯爵家所藏の金銀錯狩獵紋鏡の洛陽出土と信す可きこと等は右の推測を傍證するに近く、更に所謂秦鏡のうちに河北省易州の燕の下都から出る瓦當紋と同巧の饗養紋鏡の存することなどがまた省みられて來る。一體此の種の鏡の行はれ出した戰國は群雄の割據した時代として、地方に依り異色の文化の發達がまた充分考へられるのである。果して然らば壽州出土品に對して別な特色の多い透彫鏡の類は孰れの地域の製作であらうか。これを考へるには當然其の出土地なり伴出の遺物に據ることを捷徑とする。所が現在取扱ふてゐる

吾々の資料は殆んどすべて其の所傳すら失ふた遺品に過ぎないから、單により北方的であらうとする想像以外一步も進めることが出来ない。あらゆる支那考古學の部門を通じて、遺物を出土地と結びつけ、更に伴出物を併せ觀察することが、現下の最大急務であり、これを缺いては如何に論ずるとも到底實證を得難いことを痛切に感ずるのである。

〔註〕(1) 『國華』所載拙稿(前出)参照。

(2) 同じ古調を帯びた所謂秦鏡で而も圖紋の整齊なものにはなほストックレー氏所藏の一鏡等がある。前出『考古學雜誌』の拙稿参照。

(3) 前出『考古學雜誌』の拙稿参照。同種の鏡は我が守屋孝藏氏の收藏鏡中にも一例あり、米國のビッドウェル氏(R. A. Bidwell)も精良な遺品を藏してゐる。

四

上段稍、詳しく記述する所あつた一群の透彫蟠螭紋鏡に次いで、更に所謂秦鏡の新資料をなす方鏡類の二面は昨年七八月の交大阪山中商會員の支那で購入して紐育に送致したものである。其の一は變様羽狀獸紋地花菱紋方鏡とも命名す可く、一邊の長さ四寸に近い中等位の高さをして、面に反りがなく、縁の高さ二分あり、面には斑鏽を生じて、それが稍、外觀の美を殺ぐ感はあるが、而も通體鉛黒漆の銅色を呈し、鑄上りもよく、所謂壽州系の色澤を具へてゐる。出土の際一部分破損してあつたのをいま巧みに修補した(圖版第^十の1)。鏡背は三段の小さな帶狀小鈕の周圍に七面取りの八弧圈を繞らし、それと縁との間の廣い一區は所謂變様羽狀獸紋を地紋として布置した

近時出現の五六の所謂秦鏡

上に一種の花菱文帶を重ねて一の整齊な圖形をなしたものである。此の種の圖形は例へば東京帝國大學建築學教室の所藏品の如く圓い鏡に同じ式を見受けるのであつて、⁽¹⁾本鏡と同時に將來の徑四寸八分餘の一鏡(第二圖)また其の完好な實例をなすものとする。但し問題の

方鏡にあつては右の花菱形の圖紋に加へるに四隅に一種の簡單な花枝様形と其兩側に葉形とを容れてゐるのが目立つ。是は蓋し形の方から來る構圖の空隙を埋める用意を示したものと解すべきであらう。第二の鏡は一邊の長三寸六分餘で、前者よりは形が一廻り小さい。同じく白銅で鑄造せられて、いまなほ一部分に漆黒の美しい色澤を

第二圖 變様羽狀獸紋地花菱紋鏡 紐育山中商會藏

表してゐるが、其の大半は白緑の銹を以て覆はれて前者とはまた違つた外觀を呈し、出土地の同じでないことを察せしめるものがある。此の鏡の背紋は同じく變様羽狀獸紋であつて、それが小鈕を繞る方格と縁との間を埋めてゐること前例と異なる處がないが更に其の上に全區を通じて四葉座文を中にした一種の格子目紋を布置して居り、此の後者の配置には一種の規矩を認めるが、而も同じく鈕を中心として空間を繞める地紋的な傾向が其の縁に接する部分に顯著に表はれてゐて前者よりも一般鏡背紋發展の段階として古調を示すものがあり注意を惹く<sup>(圖版第
十の二)</sup>。圓形でこれと相似た圖紋の所謂秦鏡例は京都の守屋孝藏氏の所藏品中にあつた様に記憶する。

古式方鏡の第三例をなす所の變様羽狀獸紋地四獸方鏡は前二者に先立つて大阪淺野棟吉氏の將來したもの、實物はいま京都守屋孝藏氏の儲藏に係る。此の鏡、作りがやゝ厚く一邊の長約四寸四分あり、通體堅い綠鏽が多く、其の半ばに蝦蟇斑鏽を生じて、爲に一部分に龜裂乃至歪み等を見受ける。併し銅の地肌を表はす部分は美しい白光の銅色を呈して銅質の佳良を示し、鮮かな土中古の色澤は其の新出の遺品であることを物語つてゐる。鏡背は體制概ね前二者に同じく全面に羽狀獸紋を布置した式であり、其の鈕を繞る八弧紋帶また第一の鏡と同規に出てゐるが、本鏡では内區の四方の地紋上に各一個の四足獸を薄肉刻で表はし、それに頗る特色がある。現在綠斑鏽で覆はれた部分が多くて此の圖形の一々を詳しく確め難いことを遺憾とするが、圖版第十一の1に示した鏡背寫眞の向つて右は明に虎を表はしたものであつて、上の一個は牝鹿と解せられ下方の一

は其の獸首の形並に首輪の工合等から番犬を描いたものと思はれる。そして是等は孰れも寫實の妙を得て地文の「メキヤニカル」なるとは好對照をなして居り、當代の古鏡文としては稀に觀る所である。處が前二例の方鏡と同紋のものが各々圓鏡に例を存した様に本式の獸形鏡また同じ類を見受ける。巴里の蘆氏の所藏する變様羽狀獸紋地丁字形飾三獸鏡がそれであつて、⁽²⁾同じ類は去る昭和七年夏に一面我が國へも將來せられたと云ふ。蘆氏の藏鏡は昭和五年冬某地で出土して翌年二月北平に齎されたもの、當時銹に覆はれ且つ破砕してゐたのを、後に修補して現在では圖版第十一の2の如き完形に復した。面徑六寸、縁厚三分あり、鏡背の圖紋は同じく羽狀獸紋地の上に斜な所謂丁字形を三個配した所は所謂秦鏡に最も類例の多い式に過ぎないが、別に丁字形の間に四足獸各一を表はした點が珍らしく、而して此の鏡では其の獸形が孰れも鮮明な鑄上りを示し、二個は同形で牝鹿と思はれるものであるのに對し、他は一見家畜としての犬を表はしてゐることが認められる。なほ是等各圖形には周圍に若干の無地帶を伴ひ是等が地紋の上に後に加へたことを示すものがある。

さて右の二鏡は外形にこそ圓と方との違ひがあり、また圓鏡には丁字形なる別な分子をも存するのではあるが、其の同一形式に屬することは謂ふまでもなく更に細部に於いて二者に印する獸形の合致が興味を唆るのである。即ち圓鏡に見る二つの違つた獸形は共に方鏡にも存して、其の形狀乃至大さなどの全く相合ふこと兩者の對比から確められる。犬と牝鹿形にあつては一は圖形甚だ鮮明であるのに較べて、他は稍々朦朧たるの傾向を見るが、犬に於いては其の首

輪及び各部の一致が顯著で、二者は正に符節を合す如きものがある。

是等の鏡に於ける動物圖がよく其の特徴を寫し、それが薄肉刻で表出せられた處は、支那古代の珍らしい例として當代の美術彫塑の考察に一の新しい資料たる點に本誌讀者の注意を惹くものがあると思ふ。またそこに家畜としての犬の表はれてゐることも興味ある一の事實とするが、吾々の如き一般鏡背紋の發展を攷へつゝある者に取つて、右の同似是上來の記述が自ら物語るところの所謂秦代に於ける圓鏡と方鏡との同時に並び存したことに確證を加へると共に、かくの如き同形の據つて來る所以の解釋として、それがまたもと單なる地紋鏡に漸次圖形を附加して一の纏つた鏡背紋を形造る過程上、型に依る寧ろ機械的な個々の圖形の地紋上の布置がかかる結果を來したことゝ考へしめる點に於いて、兼て此の型に據る同紋の繰返した表出が同時に所謂秦銅器紋の一特徴を其の儘に示現してゐる所から所謂秦鏡の性質がより廣い視野から顧みられることになつて興味を深くする。これは所謂秦銅器なり所謂秦鏡の性質考査の基礎づけに従事してゐる者の閑却し難い重要な點で、前の透彫獸形鏡と併せて右の兩者の技巧の合致が、今や種々の點から其の確かさを加へた所謂秦銅器を以て戰國から漢初に亙つて行はれたとする年代觀を移して、所謂秦鏡のそれを推す據所ともなるわけである。

〔註〕(1) 同じ鏡は獨逸ケルン市の東洋美術博物館にも一面ある。Otto Künnele;

Jörg Trübner zum Gedächtnis. (Tafel 44.)

(2) 所載の寫眞は盧氏の送與したものである。こゝにこれを公にするに際して、其の好意を感謝する。

(3) 梅原「所謂秦銅器に就いて」(『史學』第十卷第三號)参照。

近時出現の五六の所謂秦鏡

五

所謂秦鏡の新資料として最後に擧ぐ可きものに昨年安徽省壽州から出土したと云ふ一面の細紋地人物畫象鏡がある。これは後巴里の蘆氏の有に歸したとの事で、まだ實物を觀るに至らないが、淺野・白江兩氏の談に據ると壽州物特有な美しい色澤をした極めて厚い作りで、面徑は六寸内外あると云ふ。いま拓影(圖版第十二)に依つて其の特色のある鏡背を見よう。これは前段の諸鏡とは違つて、鈕の座には蟠居した虺龍形を表はし、それを繞つて細紋地の一帯と匕面取りの幅廣い素帶とを置き、次に主文様を配する内區となる處、より複雑な體制に屬し、此の帶圈の配布と形式とは所謂秦鏡に數多い蟠螭鏡の類と趣を一にしてゐる。然し其の主文様が蟠螭ではなくて人物を中心とした畫象から成る點は從來の例を破るものである。右の畫象を配した内區は内帶から恰も湧出した様に描き出された朶雲とも或は山岳とも見る可き圖形で四分せられて、其の各々に上下二段には、同一の圖像を繰返してゐる。下段の圖様は龍かと思はれる怪獸に駕した人物と、座して獸を豢ふ人物圖とであり、上段では中央に端座して琴を弾く人物の右に兩手を舉げて舞ふ像を描き他方には立ちて恰もその觀者たるが如き人物を表はしてゐる。而して此の圖の左右に双枝の樹木を置いて、一方に相談する人物と、他方に虎と覺しき怪獸を豢ふの圖象とがある。是等の圖象は孰れも細紋地の上に平面的に布置せられ、而も同圖形を繰返してゐるのは同式の所謂秦鏡文と異なる所ないが、唯各區の間の人物獸形等が大きい其他にそれぞ

れ少許の差違を存して、型に據る表出でない點に別個な特徴がある。

以上四度繰返されてゐる五つの圖象は、一見した所では各個單獨のものを恰も文様の如く、一の空間を埋める爲に適宜に配布した様に思はれて、其の間の脈絡など固より考へ難いが、而も他面樹木を個々の圖間に置いたことが一の物語りの違つた場面を表はす一つの方法とも解せられるし、また表はされた圖象の漢代畫象石のそれに髣髴たるものある點から其の然るを思はしめるのである。而してこのことは湧出する朶雲狀のものが漢代の大形空埴に表はれてゐるものや、また北蒙古ノイン・ウラ山發見の縐子の織出文に見る所に近く、これが一種の僊山湧雲を伴せ表徴するに於いては一層繪畫的の趣を加へることになつて、素朴なうちに如上の表現に對する實らしさが考へられて来る。然らば是等の畫象は何を物語つてゐるのであらうか。これに就いては私にはなほ適當な解釋を得ないから、いまは遺品を素材のまゝに提供して、博雅の考察を俟つの外はない。但しかゝる見地を離れても、個々の形象のうちに於いて、相向ふ人物像は、舞踊の圖などと共に、當代の服飾乃至日常生活の一面を表はしたものと見て、それが所謂秦鏡の一に見ることは、よしや其の實年代は或は前漢代に入るとしても、一の興味ある新資料と云ふ可きであり、また本鏡の圖象の影繪的な表出法の畫象石との一致が兩者の關係から後者を改めて省察せしめるものもあらう。

私は嚮に細川侯爵家所藏の金銀錯狩獵紋鏡を紹介した際、其の形式から推して所謂秦鏡のうちに加ふ可きことを論じたのであつたが、當時其の圖紋の餘りにも自餘の秦鏡とかけ離れた點に奇異の感を殘

した。然るにこゝに本例の出現に依つて、其の精粗は固より同一ではないが、必ずしも前者の例外でない事を知り得たのは、私一己としてまた愉快に思ふ。聞く處に依れば、此の鏡の出現後守屋孝藏氏また相似た所謂秦鏡で一部に人物像のある遺品を求められたと云ひ、なほ同氏收藏の一面の弧紋鏡に人物の彩畫のあることも明にせられた。是等是他日同氏藏鏡の圖録の刊行を俟つて紹介せられるであらう。かくして支那の古鏡特に其の古式の遺品に關する吾々の知見は年と共に加はつて殆んど停止する所がない様に見える。本年は恰も故富岡先生の歿後十七年に相當する。これが先生に依つて開かれた支那鏡鑑の學の現在到達しつゝある成果であることを思ふと感慨の深いものがあり又追慕の情を新にせざるを得ない。併し改めて省みるに是等の資料がすべて出土地の明ならぬ點に於いて考察は形式觀に終始して、考古學上一層緊要な伴出遺物からするより廣い省察は殆んどみなこれを將來に遺されてゐる。傳へる處⁽¹⁾近時安徽省壽州附近には所謂秦鏡と伴出する遺物の「フンド」が其の數を加へつゝあると云ふ。是等から入つて從來の單なる形式學的研究に別個の基礎づけ並に考察を試み更に進んで同地の遺跡を發掘調査することは、今後の所謂秦鏡の研究引いては支那考古學上に於ける最大の關心事であらねばならぬ。

(昭和九年一月九日稿)

〔註〕(1) 昨年末壽州地方を旅行した巴里のグットマン(Edgar Gutmann)氏の談話

に基く。氏が其の際同地で購入した一括遺物は其の例證とも見る可きもので、古玉七個、銅鐵三個、銅印一顆の外に所謂秦鏡が伴出したと云ふ。右の古玉以下は頗る興味ある遺品であるから他日別に紹介することにする。

透彫蟠螭怪獸紋鏡（原寸）

紐育
ウインスロップ氏藏

透彫蟠螭紋鏡（徑四寸八分）

東京 大倉集古館藏

（大正十年初夏撮影寫眞）

(1) 虺龍雷紋沈彫鏡面（原寸）

東京 大倉集古館藏

(2) 透彫蟠螭紋鏡背（原寸）

東京 大倉集古館藏

(3) 透彫蟠螭紋鏡（原寸）

東京 帝室博物館藏

(1)

透彫
虺
龍紋
鏡背形金具（原寸）
倫敦 大英博物館藏

(2)

同右（原寸）
英國
バーネット氏藏

(3)

透彫
四獸紋
鏡背形金具（原寸）
大阪 小澤亀三郎氏藏

(1) 變樣羽狀獸紋地花菱紋方鏡 (原寸)

(2) 變樣羽狀獸紋地格子目花紋鏡 (原寸)

紐育
ウインスロツプ氏藏

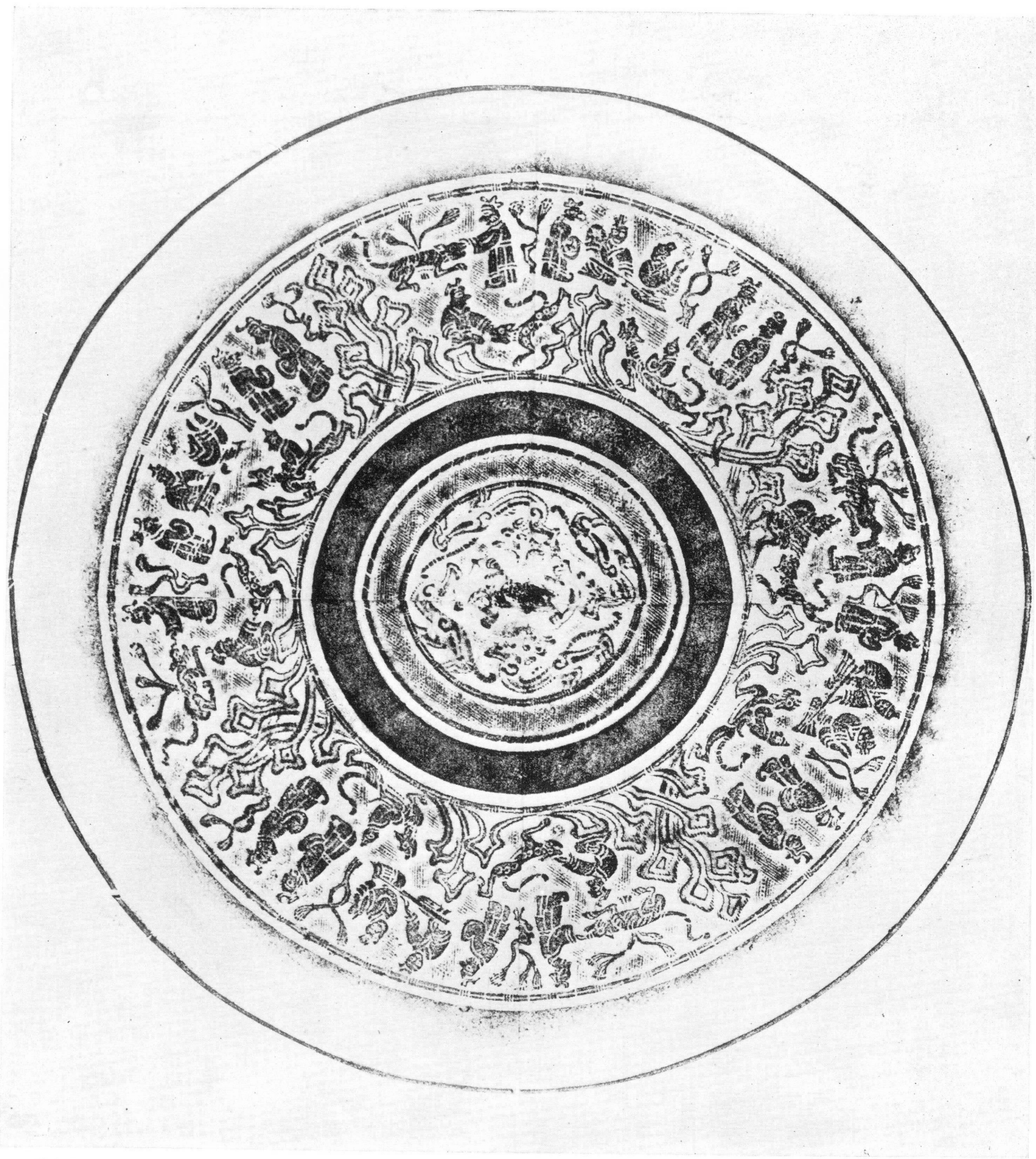
紐育
山中商會藏

(1) 變樣羽狀獸紋地四獸方鑑 (一邊長四寸四分)

京都 守屋孝藏氏藏

(2) 變樣羽狀獸紋地丁字形三獸鏡 (徑六寸)

巴里 蘆氏藏



傳安徽省壽州出土人物畫象鏡拓影

巴里 蘆氏藏